

『始原の俳句―兜太・芭蕉そして空海について』

こんにちは！野崎憲子と申します。

新型コロナウイルスがずっと居座り続ける、猛暑の続く中、菊池寛記念館へお集まりくださりありがとうございます。ありがとうございました。

今年になり、「密閉」「密集」「密接」の「三密」を言われ続け、本日、このように、様々な規制が設けられた中の講座であります。会場においでくださり本当に嬉しいです。

この「三密」には、お気付きの方もいらっしゃると思いますが、もう一つの「三密」があります。真言密教で言いますところの、手に印を結ぶ身密、真言を誤りなく唱える口密（くみつ）、心に本尊を思い浮かべる意密であります。後ほど、真言密教の三密についても、触れさせていただこうと思っております。

私は、金子兜太先生の主宰していた俳句結社「海程」の同人でした。現在は、その後継誌「海原」に所属しています。

わが師、金子兜太は、2010年に、第58回菊池寛賞を受賞いたしております。奇しくも、その年の11月に私は、牟礼町にお住まいだった高橋たねをさんという「海程」の先輩と「海程香川」句会を立ち上げました。翌2011年2月に肺炎の為、高橋さんは急逝されましたが、「継続は力

なり」で、毎月一回サンポートホール高松での句会を開催いたしております。そして今月で百十回目を迎え、十一月には記念アンソロジーの刊行を予定いたしております。

昨年、十月には、「海原」の第一回全国大会が、ここ香川の地で開催され、この菊池寛記念館にも友人が「海原」公開講演会のポスターを持って来てくださったと伺っています。館長様を始め記念館の皆様方、その節は本当にお世話になりました。そのご縁で今、お話をさせていただいております。

因みに、一つお詫びがあります。この講座のお話をいただいた時は髪を染めていましたが、「新しい日常」という言葉が妙に気に入り、以前から憧れていた銀髪を目指して現在この通りでございます。記念館へお送りした写真と相違しますが、本人でございます。ご寛恕の程をお願い申し上げます。

私は、学者でも何でもない只の俳句実作者に過ぎません。俳句初学の頃より続けている、師、金子兜太や芭蕉の句の日々の朗読から感受したもので、産土であるこの香川の地で、幼い時より、親しんでまいりました、「真言」への思いを元に、拙い考えを述べさせていただこうと思っております。

私は、四国霊場八十六番札所志度寺の門前町で生まれました。幼い時からおばあちゃん子で、三文安いと言われながら、毎日のように、世界中で一番大好きな祖母にくっついて志度寺にお参りに行っておりました。師の金子兜太は、秩父音頭が、身体中を駆けめぐっていました。私が、祖母が、それぞれの仏様の前で唱えていたご真言や、朝日、夕日に手を合わせつつ唱えていた般若心経が、今も、身の中を駆けめぐっております。例え

ば・・・

大日如来のご真言

△おん あびらうんけん ばさら だとばん▽

弥勒菩薩のご真言

△おん まいたれいや そわか▽

普賢菩薩のご真言

△おん さんまや さとばん▽

観世音菩薩のご真言

△おん ありりきや そわか▽

どのご真言も、最後に上に跳ね上ってくる。これは、花火玉のような、俳句の調べそのものでもあると、私は思うのです。

最後に空海さんへの思いを述べさせていたたくのを楽しみにいたしております。

これから申し上げます話は、私が、2010年2月から二回にわたり「海程」誌に寄稿した文章「アニミズムの眼」がベースになっております。師にこの原稿をお見せしますと、「善し！良く書いた。」と、すぐに海程誌へ掲載してくださいました。

あれから、十年。 世界は混迷の度を増すばかりです。そして今は、新型コロナウイルスの恐怖に怯える私たち人類であります。当たり前のことでもありますが、大昔から、ウイルスも「生きもの」草木虫魚そして人類も「生きもの」
みんな、大いなるいのちに生かされているものであります。

今回のテーマは「始原の俳句―兜太・芭蕉そして空海について」です。

このテーマの発端になりましたのは、拙句……

前衛とふ始原の眼花ひらく

です。

師は、前衛俳句の旗手とか、猛将とか呼ばれていましたが、いわゆる時代の最先端をいく目新しさを目指すアバンギャルドのように言われる事はお好きではありませんでした。先の私の句を海程秀句に選んでしきりに褒めてくださいました。前衛とは、始原の眼Vであると私は思っています。このことを、これから皆様へお話しながら少しでもお伝えさせていただけようと思っています。

小学校に入る少し前だったとおもいます。私の家の庭先に、蒼い汁を出して転がっている蛹を見つけました。死んでいるのだと思い、小さな箱に入れて土の中に埋めました。それから、しばらくたつたころでした。ざわざわ胸騒ぎがするのです。特に、虫を埋めた土のあたりを通った時に強く感じます。臆病な私なのですが、気になって仕方なく土を除き箱を出し中を開けてみますと、いきなり真っ黒い塊が大きな羽音を立てて飛び立ちました。

揚羽蝶でした。あんなに腰が抜けるほど驚いたことは、今のところ、最初で最後でした。六十年経った今でも蝶が消えて行った天空の隙間が忘れられません。

アニミズムとは、あらゆる宗教の源である精霊信仰です。森羅万象の一つ一つにいのちが宿り、カミと呼ばれています。これは、古来から日本にまします八百万の神々と通じるものであります。その、精霊と呼ばれる私たちの生まれてくる空間は、俳句の生まれる空間でもあるという思いの中で、アニミズムの俳句とその思想を通して、今、絶滅の崖っぷちに居ると強く感じる私たち人類のその足元を見つめ直してみたいと思います。

資料にあります俳句をご覧ください

木の葉ふりやまずいそぐないそぐなよ

加藤楸邨

……これから幾たびも楸邨さんに登場していただきます。最初、タイトルを「始原の俳句―兜太・楸邨・芭蕉そして空海について」にしようと思ったのですが、少しでもシンプルにと削らせていただきました。加藤楸邨さんは、師、金子兜太のお師匠さんです。これからは全て敬称抜きでお話をさせていただきます。

この「木の葉ふりやまず」の句は、私が、アニミズムの風を初めて感じた俳句です。出口の見えない心のトンネルの中で見出した一条の光であり、俳句と出合うきっかけとなった句でもあります。

もう、三十年ほど前の事になりますが、私の一番上の子が不登校になり、母親として何とかしなければと思うばかりで、まったく自信を無くしてしまっていた時代がありました。その時この句に出逢い私の心の中に大きな窓が開きました。「木の葉は降り続けているんだから慌てることはないんだよ」と言ってくれているようでした。今も私の一番の愛唱句です。

木の葉ふりやまずいそぐないそぐなよ

この粒々とした呪文のような言葉を唱えるたびに、心の中の不思議な空間に芽生えた木が何かにぶつかりながら伸びてゆきます。そして私の中に眠っている記憶を少しずつ呼び覚ましてくれるように感じます。

十六年前の夏のことです。角川書店の俳句総合誌に「熊野俳句夜学」の参加者募集の広告が出ていました。それを見て参加を決め、前泊をし、新宮から熊野交通の定期観光バスで那智の滝へ向いました。八月のお盆を過ぎた頃、あたかも熊野地方に台風の眼が差し掛かっている時でした。熊野交通はすごいです。30人乗りの大型バスに、乗客は、かなり年配（今の私くらい？の）方と、私のたった二人だけ、台風の眼が近づいている中、

バスを出してくれたのです。

根津美術館蔵の国宝『那智滝図』を心に描き、夢にまで見た滝でした。

鳥居をくぐれば滝しぶきが降りかかり、風景と呼ぶにはあまりにも凄まじいエネルギーに取り囲まれ言葉を失ってしまいました。滝は滝口から落ちてくるのではなく、すさまじい勢いで地中から伸び上がっているようでした。宗教とか道徳とか、あらゆる概念を超越した世界を感じました。太古も、現代も、未来も、ただ一枚の空間となり、その中で那智の滝は、宇宙の中心へと限りなく広がっているようでした。この巨大なエネルギーの空間のことを知りたい、その奥にあるものをぐっと掴みたいと考えました。家に帰り、松尾芭蕉、与謝蕪村、小林一茶、正岡子規、高浜虚子、そして虚子に続く、先人の作品を読み漁りました。その中で……私の思いを満たしてくれたのが、師、金子兜太と松尾芭蕉の俳句でした。これが、いのちの根源を見つめるアニミズムの俳句であり、攻めるなら攻めてみよという前衛の真髄であると思いました。さまざまな個性の違う作品のなかにも、絶妙なバランス感覚があり、句と句の間から爽やかな風が吹き渡っています。

何かが、サムシングがあるのです。自らの人生の過程を通して、自らの血と言葉でそれぞれの独創的な俳句の世界を構築しています。高い芸術性とともに社会的弱者へ向ける温かな眼を持っています。

では、二人の作品をたどることからはじめたいと思います。

1 「いのちの空間」について

おおかみに螢が一つ付いていた

りゅうかみ

おおかみを龍神と呼ぶ山の民

狼に転がり墜ちた岩の音

狼生く無時間を生きて咆哮

山鳴りときに狼そのものであつた

月光に赤裸裸な狼と出会う

ニホンオオカミ山頂に行く灰白なり

これは、金子兜太第十三句集『東国抄』の中の狼を詠んだ作品群の一部分です。もう日本では絶滅したと言われている狼が、現世の向こう側からやってくるのを生き生きとした直観で捉えています。ゲートが、植物に深く興味を持ち、そこに考え出されたのが原植物ウルなら、こちらはいかなる狼よりも狼らしい、始原の狼である原狼ウルです。一つ一つの作品の中から、秩父連山の嵐気や狼のらんらんとした目の輝きが鋭く伝わってきます。それは産土である秩父と、狼を愛してやまない兜太の眼差しでもあります。

金子兜太著『俳句専念』の狼に関する文章のなかに……

資料をご覧ください

万物の霊長を自覚した人間という生きものが、生を謳歌しその分死を怖れて、時間が作られ増長していった、ともいえる。いまでは、人間

は、自分で作った時間に振り回されている。それによって、死を早めてさえいる。わたしは、この時間意識を越えて、「狼の生の空間」を自分のなかに獲得したい、と願うようになったのです。「生そのものである生」の獲得。その限りない「自在さ」、

とあります。師の好まれた、ゲダンゲン・リリク（思想的抒情詩＝思想詩）とは、まさにこの狼の作品群に当てはまるのではないかと思いました。変幻自在な、生そのものの空間を師は「いのちの空間」と呼んでいました。それは時間をも包含してしまった空間であります。森羅万象のいのちは一つであるという認識。そして、その中から出てきた「人間という生きもの」という客観的な人類の把握、無時間という時間意識。この視座に立つアニミズムの俳句こそ、混迷の真只中にある二十一世紀の活路となるのではないかと考えます。生きものの感覚を見事に捉え、「私はつねに過程にある」と薄氷の上をバリバリ進んでゆく荒武者のように、つねに若々しい前進を続けていた師の作品の中に、現代の人間が失いかけている優しさや烈しさを感じます。

わたしは、兜太作品に強い赤のイメージを持ちます。いや、赤と黒の段だら模様と言った方が正確です。それもお互いに競いたつ赤と黒。なかでも、[資料をご覧ください](#)

墓地も焼跡蟬肉片のごと樹々に 『少年』

原爆許すまじ蟹かつかつと瓦礫あゆむ 『少年』

彎曲し火傷し爆心地のマラソン 『金子兜太句集』

この三作品は自らが実感してきた戦争の残酷さ、怒り、哀しみにあふれています。ごつごつとした句の調べのなかに映像が鮮やかに立ちあがってまいります。昭和十九年から三年間に及ぶ、赤道近くの珊瑚環礁トラック島での過酷な戦争体験の中で幾多の死の淵を乗り越えてきたからこそ、底知れないエネルギーと温かなところを持った俳人金子兜太が誕生したのではないでしょうか。二〇〇九年、NHKの『ようこそ先輩』という番組で、兜太の語る戦地での悲惨な体験談を身じろぎもせず聞いていた母校の小生たちの瞳が忘れられません。唯一の被爆国である日本から、こういう戦争を詠んだ優れた俳句がもつともつと世界中に広まっていかなければならないと思いました。

その折の句群が師の最終句集『百年』に収録されています。これも、[資料をご覧ください](#)

秩父盆地皆野小学校はわが母校、そこを訪ねて尿瓶を語る と前書があります。

後輩と尿瓶に冬のひかりかな

小学六年尿瓶とわれを見くらぶる

山枯れて女子小学生尿瓶覗く

小学生尿瓶透かして枯山見る

われの尿瓶を嗅ぎ捨てにして無礼かな

師の父上は、金子伊昔紅と言う名の俳人でした。寒い夜にトイレに行き脳梗塞になりそのまま亡くなられたと聞いています。その為か、師は尿瓶愛好者でした。秩父俳句道場でも、尿瓶の効能を何度も熱く語っていました。余談ですが、伊昔紅は、皆野町で金子医院を開業していました。師が幼い頃より夜になると句会を開いていたそうです。会もたけな

わになるとお酒も入って喧嘩のようになるので師のお母様が「兜太、俳句は喧嘩だからね。やっちゃいけないよ」と話されていたそうです。昭和初期に明治神宮へ奉納する為に伊昔紅が秩父音頭の歌詞を新しく作ったり公募したりして今の形に整えられたそうです。それまでは、野卑な歌詞が多く、とても全国へ向けて発表できなかったとか。師は、道場での夕食の時間などよく秩父音頭を歌ってくださいました。道場の横には荒川が流れ師の哀愁のある歌声とよく響き合っていました。

[資料をご覧ください](#)

曼珠沙華どれも腹出し秩父の子

『少年』

古来狼をカミと仰ぎ、日本のお臍のような地、秩父の山靈はぐくに育まれたかわいい子どもたちの顔が見えてくるようです。あつけらかなとした熱いエネルギーに溢れています。しかし読み返すほどに、何かを叫びながら駆けてゆく映像となつてまいります。「秩父の子」から、昭和初期、理不尽に閉ざされた山国の人々の暗部の激発であった秩父困民党のことが、頭をよぎります。歴史の大きな流れに逆らうことの難しさ、流されていかにざるを得なかった人たちの悲しみを曼珠沙華の妖しいまでの赤に感じます。

山峡に沢蟹はなの華微かなり

『早春展墓』

沢蟹との出会いの一瞬の喜びを「微かすかなり」というとてもデリケートな言葉で巧みに捉えています。初めて兜太作品に触れたとき、海のうねりのようなリズム感と分厚くてつかみ所のない力を感じました。しかし、全ての作品を読んでいくにつれ、この句のように繊細な美しさをたたえた佳句がたくさんあるのにも驚かされました。剛の句と柔の句の距離感そして多様性は、古今に比類無きものと思います。

暗黒や関東平野に火事一つ

『暗緑地誌』

この暗黒という闇を意味する言葉の存在感と切れ字による時空の捩れから、歴史の闇の奥で燃え続ける狼煙のろしのような火を想像します。隣りのローマ字で書いたルビにご注目ください。

ANKOKUYAKANTOUHEIYANIKAJIHITOTU

暗黒や関東平野に火事一つ

K音の繰り返しによる不気味な緊縛感の漲る映像はまさに一枚の名画であります。

兜太作品は濃いイマジネーションに彩られ、腹の底からじわっじわっと突き上げ、鳴り響いてくる生命いのちの塊のような音楽に満ちあふれています。

そこには縄文の匂いがします。ものに喩えるとすれば縄文土器。その中でも奔放極まりない火焰土器ではないでしょうか。この豪快不敵の土器の背後に巨大な霊の気配がします。この気配は、芭蕉の作品に触れたときにも感じるものであります。

2 幻の巷

ちまた

資料をご覧ください

渚に立って、月に照らされた海を見つめていますと、波を動かしているものの影をかすかに感じることはありません。そんなときに、浮かんでくる芭蕉の句があります。

道の辺の木槿は馬に食はれけり

山路来て何やらゆかし葦草

よく見れば薺花咲く垣根かな

発想の契機は、木槿であり、葦草であり、薺花であるのですが、一つ一つの花を発見したときの芭蕉の喜びと驚きが伝わってまいります。野末へ向ける芭蕉の目線の低さと共に、造化そうかそのものの本質をとらえようとする、熱い眼差しを感じます。ほぼ同じ年に、

古池や蛙飛び込む水の音

の句が生まれます。蕉風開眼の一句といわれ、日本人なら誰でも知っている名句です。何度も読んでおりますと芭蕉の「古池」が時おり不思議な鏡に思えてくることがあります。切字「や」は、幻の空間を創り出す魔法の助詞であると思います。

この古池の句を、師は、「侘びさびの代表句のように言われているが、墨田川へちやぽんちやぽんと沢山の蛙が飛び込む、いのちの賛歌を詠っているのだ」と断言しています。私は師の解釈に賛成ですが、皆様は、どう思われますか？

「古池」の句を得た芭蕉は、更科紀行を経て奥の細道の旅へと求心的な思いはますます大きくふくらんでゆきます。

奥の細道の旅に出たのは、元禄二年の芭蕉が四十六歳の時です。それから亡くなるまでの五年の歳月をかけて『おくのほそ道』を書き上げました。深川から大垣に到るまでの百五十日間、二千六百キロの旅は、虚実をない

まぜにした連句的な紀行です。それは不易流行から軽みへとつづく発見と
醞釀うんじょうの旅でもありました。

行春や鳥啼き魚の目は泪

前文は「弥生も末の七日、明けぼのなぬかの空朧々くろうろうとして月は在明ありあけにて光おさまれる物から、不二ふじの峰幽かにみえて上野、谷中やなかの花の梢、又いつかはと心ぼそし。むつまじきかぎりは宵よりつどひて、舟に乗て送る。千じゆと云所にて船をあがれば、前途三千里のおもひ胸にふさがりて幻のちまたに離別の泪をそとぐ。」とあります。旅立ちの不安、別れの悲しみが地の文に記されていますが、何度も読んでいますと「鳥啼き魚の目は泪」が力強く響いてきます。奥の細道へと向かう、芭蕉の心の熱度と圧力で一気に謳いあげられた作品であることがわかります。地の文と俳句の矛盾した心情を感じます。この矛盾こそ芭蕉の深さであり、この旅にかける思いが余計に伝わってまいります。

田一枚植ゑて立去る柳かな

遊行上人(一遍)が奥州下向の際、朽木くちぎの精が現れて西行の歌「道のべに清水流るる柳かげしばしとてこそ立ちどまりつれ」が詠まれた場所を教えたとする謡曲『遊行柳』をこころに生まれた一句です。様々な解釈のある作品ですが、師の曰く、「芭蕉は、いのちの空間から出てきた遊行柳が田植えをして立ち去ったと感応したのだ」という鑑賞が一番あたっていると私は、思います。出立の時、幻のちまたに離別の泪をそそいだ芭蕉は、謡

曲の世界を軸に、彼の幻の空間の奥へずんずん進んで行くのであります。

閑かさや岩にしみ入る蝉の声

「閑かさや」に究極の静謐せいひつを感じます。岩にしみ込んだ蝉の声が静寂の底から再び響いてくるようです。回転する独楽のような静けさとも思われて、おかし味も少し。

雲の峰幾つ崩れて月の山

ようやくの思いで、一九八〇メートルの月山頂上にたどりついたところで詠まれた句です。この旅のなかで一番精神の高揚した場所であります。山頂で一夜を過ごし、天地流行の世界観を掴みました。天地流行とは、天地に存在するものすべてが、不変の存在でありながらも、変わり行くものであるという考え方です。そこには、『赤冊子』に見られる「高く心を悟りて俗に帰るべし」の軽みの世界がすでに内包されています。

芭蕉は、修験の行者姿で月山に登りました。彼の心の中には、常日頃敬愛してやまなかつた歌人であり真言宗の僧である西行から空海へ、すなわち真言密教や山岳修験の血脈けちみやくが熱く流れていたのであります。

荒海や佐渡に横たふ天の河

新潟の日本海に面した出雲崎での句であります。出羽三山、象潟に続いて、海沿いに旅をつづけているうちに、日本海の怒濤の響きが心の中に少しずつ浸み透ってきます。そして時至って、最短定型詩の閑ざされた底を

打ち破って豁然と広がった大景ではないでしょうか。
日本海に寝そべった天の川の息遣いまでもが聞こえてくるような生々しさを感じます。

あかあかと日はつれなくも秋の風

調べの美しさにとっても惹かれます。秋になると決まって口を衝いて出てくる句です。「句調はずんば舌頭に千転せよ」とは、『去来抄』にある芭蕉の言葉です。芭蕉にとって俳句は何よりも音楽であったのです。斉藤茂吉の「あかあかと一本の道とほりたりたまきはる我が命なりけり」の歌は、この句を心に創られたものだといわれています。加藤楸邨は『芭蕉全句』のなかで、「正岡子規は、此句[△]あかあかと日はつれなくも秋の風[▽]は平々凡々の句であり、[△]つれなくも[▽]の語は無用であると述べているが、芭蕉との発想法の違い、子規に出発する近代俳句との質の差異がはっきりとうかがえる作品である」と書いています。この[△]芭蕉との発想法の違い、子規に出発する近代俳句との質の差異[▽]を指摘した言葉は、楸邨の『芭蕉全句』の白眉^{はくび}であります。芭蕉の研究に生涯をかけた楸邨の興味深い意見であると思います。

先にも申し上げましたが、私は初学の頃より、師と芭蕉の句を朗読する事を日々の楽しみにしています。師はよく「俳句は理屈じゃない！」と話されていますが、師と芭蕉の句を読み続けている内に、私の中で真言となり、鳥獸草木の言葉の様に感じ・・・^{ちほくじくさく}△縄文のリズム[▽]と云う言葉が浮かんでまいりました。

蛤のふたみに別れ行く秋ぞ

「おくのほそ道」最後の句であります。冒頭の「月日は百代の過客にして」から始まるところの「草の戸も住替る代ぞ雛の家」を承けては万物流転の思いが実にさらりと詠まれ、「行く春や鳥啼き魚の目は泪」に対しては、連句の発句と挙句のような関係で見事に作品を閉めくくつていきます。天地流行から軽みへ、なんと見事な満尾まんびでありましようか。

3 曼荼羅について

これから、空海のお話に入りますが、私にとって、とても興味深い世界であるとともに難解であります。独学ですので、かなり参考資料のお世話になっております事と独断と偏見の私見も有るかと思いますが、ご了解ください。

アニミズムを考える上でもう一人忘れてはならない人がいます。それは空海です。岩田慶治著『アニミズム時代』には道元と親鸞が登場しますが、空海こそ、アニミズムの体現者であり、その第一の思想家だと私は考えます。空海の曼荼羅はアニミズムの本質であるいのちの世界を凝縮した図画であり空間であります。空海はこの世界を、真っ向から肯定する、絶対肯定の、極彩色の芸術として表現しました。曼荼羅の歴史は古く、紀元前千年ないし千五百年頃成立したインド最古のバラモン聖典『リグ・ヴェーダ』のなかで〈巻〉（註 渦巻の巻です。）を意味する語として用いられていました。

曼荼羅図には、異宗教の神々も圧縮し内在されています。そしてその真ん中では大日如来が曼荼羅宇宙の、すべてを包み込んでいるのであります。まさにこれは、これからの人類の目指すべき多様性溢れる自由な世界であると思います。空海の著書である『秘密曼荼羅十住心論』に、彼は意図的に「真言」の梵語を「マントラ」から「マンドラ」に変更したと書かれています。つまり、映像と音楽の合体ということであり、真言も含めて森羅万象の一切が、曼荼羅なのであります。人と宇宙が三密を通じて感応するとき、大日如来と一体になると言われています。

三密とは、身密・口密・意密を言います。因みに、この三密のうち、道元は「只管打坐」ただひたすら座禅をする「しんみつ」で身密を極めました。法然は「南無阿弥陀仏」の念仏を、日蓮は「南無妙法蓮華経」の題目でくみつ口密へ真言を口で唱えること「しんみつ」の宗旨を興しました。親鸞は意密へご本尊の姿を心（意）に想い描くこと「くみつ」に専心しました。彼らの心の源にあるのも曼荼羅なのであると思います。三密は身体と言葉と心、つまり肉体そのものなのです。真裸のいのちとなり大日如来と感応することを説いているのだと思います。

空海は『声字実相義』を著し、口密のはたらきを特に、大切に考えていました。資料をご覧ください

五大に皆響き有り

十界に言語を具す

六塵悉く文字なり

法身は是れ実相なり

『声字実相義』
しょうじじつそうぎ

空海の説く宇宙言語論であります。彼の詩による考察である偈げに拠りま
すと

五種の存在要素（即ち、五大）には、みな響きがある。

十種の世界（即ち、十界）は、言葉をもっている。六種の認識対象
（即ち、六塵）は、ことごとく文字である。さとりの当体（即ち、
法身）とは、実相のことである

とあります。（五大）とは、地・水・火・風・空。全宇宙を構成してい
る五つの物質をいいます。（十界）とは、仏の世界・菩薩の世界・縁覚の

世界・声聞しょうもんの世界・天界・人間界・阿修羅界・畜生界・餓鬼界がきかい・地獄界。

地獄から仏性を開顕かいけんする最高の悟りの世界までが混在している心の縮図を

表します。（六塵）とは、色塵しき（色）・声塵しょうじん（声）・香塵かう（匂い）・味塵み（味）・

触塵そくじん（触る）・法塵（思想）。認識作用の対象となるものを示しています。

つまり大宇宙の一切が真理を語っており、その一つ一つが、五大に響きあ
りの曼荼羅の世界なのであります。

空海とは、空の海。空とは、空の教えであります。すべての存在を空と
見ることによって、物や心への執着から生ずる人間の煩惱を解消しようと
する教えます。「救いがたき人の世である生死しょうじの海の、その猥雑な豊かさ
をそのまま保ちつつ、さとりの世界へ離脱することはできないのか、空海

の法号は、こうした問いかけの表現であるに違いない」と空海の名の由来ほうごうを上山春平は著書『空海』のなかで書いています。うえやましゆんぺい

混沌とした、いのちみなぎる大宇宙の美しい秩序を空海は生涯問い続けたのではないでしょうか。空海の言葉にマグマのような血潮とエロスを感じます。

初期密教の尊格である十一面観世音菩薩の十一番目の顔は真後ろにあり、正面からは見えませんが大笑面という、大笑いをした顔であります。底抜けに楽しくて笑い、悲しみの深淵に居ても笑い、怒り心頭となっても笑い、いつでも笑っている顔であります。大日如来の顔でもあり、私たちの顔でもあります。この底抜けの笑いは、芭蕉の軽みにも通底していると考えます。「よく迷い、よく悟れ」と、空海は後世の私たちに語りかけているのではないのでしょうか。三千大千世界さんぜんだいせんせかい（みちおうち）から空海の大らかな笑い声が響いてくるようです。

資料表紙絵をご覧ください

この絵は南方曼陀羅と呼ばれています。核の周りを動く電子の軌跡のような線と、そこにクロスする直線から出来ていますね。描いたのは南方熊楠という明治時代の民俗学者です。皆さんの中にはご存知の方がたくさんいらっしゃると思いますが、熊楠は、博物学者でもあり、特に粘菌の研究で有名です。神社合祀ごうし反対運動をして和歌山県の鎮守の森を命がけで守ったことでも知られています。熊楠は、大学で正岡子規と同級生でしたが、学校が合わず退学してロンドンに渡りました。どこか空海に似ていますね。

この絵は、ロンドンで知り合った14歳年上の土宣法龍どきほうりゅうへ送った書簡の中に書かれていました。土宣法龍どきほうりゅうは、後に、高野山の官長になった方です。

[資料をご覧ください](#)

鶴見和子著『南方熊楠・萃点の思想』に「熊楠は、すべての現象が一カ所に集まることはないが、いくつかの自然原理が必然性と偶然性の両面からクロスしあって、多くの物事を一度に知ることの出来る萃点が存在すると考えました」とあります。萃点の萃は「集まる」という意味で熊楠の造語です。

非常に異なるものが、時空を超えて、グローバルな交流する。そういう影響を与え合う場としての萃点の存在は重要であると強く感じます。熊楠は、森羅万象のあらゆるいのちの直の交流を望んでいたのだと思います。この萃点の思想は俳句の世界にも、あてはまるのではないかと考えます。私は最近、句会も、「いのちの空間」であり、萃点であると強く感じています。

萃点が高野夏星兜太熊楠

『中村ヨシオ句集・天田屋文工門』

この句の作者の中村ヨシオさんは、海程の大先輩で、和歌山県御坊市に住む江戸後期文化文政時代から味噌製造業を営む天田屋九代目く当主、天田屋文工門さんでもあります。文化文政時代は、町人芸術がもつとも爛熟した頃で、小林一茶が活躍した時代でもあります。

この高野はもちろん高野山のことです。「海程」高野山全国大会の一

句です。精神の昂揚が感じられる名句です。熊楠曼荼羅が銀河系の星座のように見えてきませんか？

科学の進歩は、めざましく、遺伝子情報を読み解き、宇宙の謎にせまりつつ日々に進化しています。しかし、遺伝子の情報には、それを記したものの存在があると考えます。そういう謎が無限にあり、その一つ一つがゆっくりと読み解かれるのを待っているのではないのでしょうか。そして解き明かされた謎たちも、必然のカミであり萃点なのです。

4 「真相」について

地球の自然環境の悪化が加速度的に進んでいるといわれて久しくなります。ここ十年の間でも、東日本大震災や、福島原発事故による未曾有の被害が起こりました。年々、地球温暖化現象が深刻になり巨大台風の発生や、何千年と凍っていた氷河が溶けだすことによる様々な危機も懸念されています。私たちが生かされている、この美しい星を守るために、どのようにしたら自然と人間が共生できるのかとか、環境にやさしい工夫をしようとして話し合う時は、もう過ぎてしまっているのではないかと危惧を抱くことがあります。もちろんそういうった取り組みも大切なのですが、何よりも私たち人類そのものを変えなければならぬのではないのでしょうか。

[資料をご覧ください](#)

加藤楸邨が俳誌「寒雷」昭和十六年七月号に、

万象そのものが無くてはならぬ姿は、日常の目には、覆おちいかくされている、この覆いをつきぬけて万象の真のあらはれの微を感じ、ここ

から真実相に滲透しなければならぬ。・・・真の写生・真の抒情は、この中にのみある。自然の人間滲透であり、人間の自然滲透である。これこそ東洋的把握の中核であり、俳句的把握の正しき伝統である。

と、この文章の中にある真実相も、曼荼羅であり、いのちの空間であると私は考えます。空海、芭蕉、楸邨、兜太とつづく大いなるアニミズム俳句の潮流があると強く感じます。この世界を、私たちが真に把握し、敷衍してゆくことが、これからの人類が地球上に生き残れる鍵であるとも考えます。

加藤楸邨の言をもう一つ、（資料では先に出してありますが）「自己の身を置く環境がどんなに激動しようとも、その底にあって、自らの激動を見つめてゐる無限に静寂な『颱風眼』これこそが私が切に俳句に望んでやまぬ俳句眼である。」とあります。この楸邨の俳句眼は、空海の真言密教の眼差し（即ち、密眼）であり、熊楠の萃点とも一致すると私は思います。

そして、社会の常識を打ち破り、自然の人間浸透、人間の自然浸透の中で、見開いた眼が、兜太師の生きもの感覚の俳句であり始原の眼なのではないでしょうか。萃点も、颱風眼も、始原の眼も、底知れない霊力を帯びた眼、つまり密眼であると思います。誤解を恐れずに言わせていただければ、この密眼こそ、密眼を持った俳句こそ、万象の声であり、渦巻く時空の中に屹立する滝であり、魔法の杖なのかも知れません。混迷の現代社会を美しい構成に変えてゆくものなのではないでしょうか。

まず創る自分を風景の後ろに置いて、自然を見つめることに集中します。渚や草葉の陰や水平線や地平線あたりに、自然と人間との接点があるように思います。精神を集中することにより、少しずつ、風景に破れが生じ、

小さな穴が蜂の巣のようになり、やがては底が抜けるのではないでしょう。いのちの空間への風穴を開けるのです。

俳句の道は、もちろん十人十色、案内人なしのけもの道という言葉がぴったりなのかもしれません。それぞれの人にそれぞれの方法があると思います。ただ、この不思議な空間に入っていくには、この方法以外には無いのではないかと考えます。そうしていつか現在の時間意識を超えることができれば、調和のとれた限りなく自由な世界の扉が開かれるのではないのでしょうか。

いのちの空間から出てくる季節の言葉たちは、皆それぞれがカミなのです。そして、塵を核として成長する真珠のように様々な言葉を纏い、音楽のような美しい造型が形つくられてゆくのがあります。アニミズムの俳句を多産することにより、それぞれの作者の深層から作者自身を自由な存在に変えてゆくのです。花火玉のような力をもつ世界最短の定型詩だからこそ出来ることなのであります。この自分を後に、自然を前に出すという俳句的な態度は、人類の進むべき道を示しているように思えてなりません。

私たち人類の先祖は、鬱蒼たる縄文の森の中であらゆるいのちと共に生活していました。それは、つい先頃のことなのです。到達点は出発点ともいいますが、アニミズムの森の奥には、怒濤のように燃えさかる炎の樹があるという予感がします。その樹の中心には音も無く烈しく渦巻く始原の眼が存在するのではないのでしょうか。熊楠も熊野の森の中で、この眼を発見して、萃点の思想を思いついたのかも知れません。

前衛とは、常に新しく、貪婪なまでに始原に向かって見返す眼を持ち、枯渴した俳句を吹き飛ばす融通無碍のこころの状態を指しているのではないのでしょうか。兜太も然り、芭蕉も然り、そして空海も然り。三者とも、

その当時の圧倒的な真の前衛芸術家であり、強烈な磁場を持ち、そこには澄みきった鏡のようなアニミズムの眼すなわち始原の眼が存在していたのであると思います。

この国で成熟されつつあるアニミズムの俳句を、世界へ向かって発信してゆくことが、東洋の果てにあり、宗教をはじめ、さまざまな文化の終着地点でもある日本に生かされている私たちの使命なのではないかと考えます。

付記1

少し時間がありますので、もう少し空海について私の感じているところを述べさせていただきます。

釣瓶落しの秋の落日を見ていると、空海はアブリダシが浮き出るように真言密教を創り上げていったのではないだろうかという思いがします。彼の密教にも、それを表現する言葉にも、どこか理屈抜きというところがあって、私にはそれがたまらない魅力です。京都駅のすぐそばにある東寺五重塔。その講堂の内陣の立体曼荼羅は、空海が「真言密教を口で伝えることは出来ない」と立体化したものだと言われています。講堂内の曼荼羅しよそん諸尊を拝顔するたびに、亀井勝一郎の『日本人の精神史』の一節「空海は誰よりもまず目の人である」を思い出します。

私は、虚空蔵求聞持法にたどり着いた頃の若き日の空海に無性に逢いたくて、高知県室戸岬の御蔵洞みくらんどを尋ねた事があります。千二百年前に、彼が

求聞持法の修行をした場所です。

「ナウボ アキヤシヤギヤラバヤ オンアリ キヤマリ ボリ ソワ
カ」

この虚空蔵菩薩の真言を百万遍誦えると、あらゆる経典の文句をすべて暗記することが出来ると言われています。この真言の意味は、△虚空蔵に帰依し奉る。花飾りをつけ、睡蓮の冠をつけた人に幸いあれ△だそうです。

空海による出家宣言の書である『三教指帰』さんぎょうしきによれば、空海は十七、八歳で都の大学に入りながら、まもなく中途退学して、山林を跋涉し、仏道修行に専念してゆきます。それから三十一歳で唐に留学するまでの間、彼がどこで何をしていたかは全くわからないのですが、虚空蔵求聞持の修行をいていたことだけは確かなようです。

青春前期とは、心の限りなく不安定な季節です。なにか運命的な出逢いがあり、猛烈な葛藤の中で、その思いが遂げられずに、戦慄しながら自身と対決して行った空海を想像します。何度も死のうと思ひ、果たせずに山岳の中をさ迷い歩いたのではないのでしょうか。そんなある日、彼は先輩の沙門から虚空蔵求聞持法を授かり、一本の藁にもすがる思いで修行を始めました。そしてその満願の日に、空海の口の中に明星が飛び込んで来たと言います。どうすることも出来ない絶望の淵から自らの力で立ち上がったからこそ、あらゆる“いのち”を包み込む優しく悲しい目を持った宗教家になることができたのだと思います。空海の湧き上がるマグマのような圧倒的なエネルギーは、彼の乗り越えて来た心の闇の深さを物語って

いるのではないでしょうか。

救われた感謝と喜びの気持ちだが、空海に『即身成仏義』

『声字実相義』 『吽字義』 『秘密曼荼羅十住心論』 『秘蔵宝鑰』

はんやしんぎようひけん

『般若心経秘鍵』などの莫大な著作を書かせたのに違いないと私は考えます。

みくらど

かつて私が訪ねた御蔵洞の、洞窟の中は、いのちを育む子宮である胎蔵界の世界だと思いました。目に見えない未生のいのちが、濃密な影を宿しながら、犇めき、渦巻いているような気配がしました。

余談ですが、『空海の風景』の中で司馬遼太郎は次のように書いていま

えみし

す。「空海の生まれた佐伯氏は、東国の毛人を討伐に出かけてゆく、その武功によって、讃岐に土地をもらった家系であるというが、讃岐の佐伯氏にはそういう典拠がなく、強いて典拠によるとすれば、征しどころか、

えみし

毛人そのものであるということにもなりかねない」 こういうことは霞

の中のことでどうだっていいのですが、私は、空海が蝦夷の血筋である方が断然似合っていると思います。縄文人の直系である若き日の空海が、縄文のまだ残る鬱蒼たる日本の森を駆け巡り、ウルトラマンがエネルギー・パワーを充電するように元気になっていったのだとしたら、想像するだけでも楽しいです。

[資料をご覧ください](#)

『吽字義』
うんじぎ

一切の世界は、一つの陀羅尼の中に、あるいは一つの梵字に集約される
陀羅尼とは、サンスクリットで書かれた呪文を翻訳しないで、そのまま
読誦どくしやうするもので、真言の長いものを云います。

「一切の世界は、一つの陀羅尼の中に、あるいは一つの梵字に集約される」・・・

これは、まさに削り取る事によって無限に広がってゆく世界最短定型詩であり思想的抒情詩（ゲダンゲン・リリク）つまり思想詩としての俳句と符合する考えではないでしょうか？

[資料をご覧ください](#)

真言密教の正嫡は、毘盧遮那びるしゃな（大日如来）↓金剛薩埵こんごうさった↓龍猛りゆうみよう（龍樹）↓龍智↓金剛智↓不空けいか↓惠果↓空海となります。

真言密教は、毘盧遮那から七人の祖師をへて空海に伝わりました。金剛薩埵は、毘盧遮那から法を受けた後、数百年後に龍猛りゆうみように授けました。

その真理の開示過程を梅原猛はその著書『空海思想について』において鮮やかな筆致で描いています。

「この心理の花園に入るには、どうしたらよいか。懺悔が、至心の懺悔が必要なのだ。まず、自らの心を、清浄、無垢にしない限り、この心理の花園に入ることはできない。この至心の懺悔に感じて、金剛神が出てくる。

お前は何のために来たのか、龍猛りゆうみようは、真理発見ための熱い意志を語る。

こうして、龍猛は塔内に入り、塔を見る。この塔こそ、毘盧遮那如来の心

理がいつぱいつまった塔である。多くの仏たちは、その塔の中で自由自在に遊び戯れている。この遊びたわむれる仏たちの前で、龍猛はかのこんごうきつた金剛薩埵か灌頂をうけ、秘密の法を伝授されるのである」と、

りゅうみやう

龍猛も数百年後に、龍智に法を授け、龍智も数百年後に金剛智に法を授けたとあります。そして金剛智は当時七百歳の龍智から、密教を学びました。毘盧遮那から金剛薩埵は言うまでもありませんが、肉体として存在しない祖師から法を授かるのです。いのちをかけた祈りが、大きく膨らんで己の中で成熟した真理(内証智)となつてゆく、それを自らの言葉で次の代へと語り継いでゆくのです。これはまさに、加藤楸邨の^自然と人間との主客浸透・真実感合の門の開扉かいひVという俳句的把握と合致するのではないのでしょうか。兜太・楸邨・芭蕉・西行・空海と繋がる俳句の系譜を強く感じました。

まとめ

空海は中国でけいか惠果阿闍梨から真言密教を授かって帰国し、空海独自の真言密教を築き上げました。その大元は、毘盧遮那佛即ち大日輪であると思えます。遍照金剛の世界です。私も、この密眼の俳句の系譜の末端に繋がらせていただいているという思いの中で、この十年句会を開いてまいりました。句会のモットーは、^素朴で自由な連衆Vの集まりです。俳歴七十年のベテランも居れば今年から俳句を創り始めた方もいます。個性溢れる方々との句会はどんな作品が飛び出すかも知れず毎回ワクワクの連続です。兜太師の「俳諧自由」を旗印に、多様性を持った句会がぐんぐん展開して

います。どういう俳句を創るかはまったくの自由です。師はよく「人間が面白くなくっちゃ俳句もつまらねえ」と話していらっしやいました。本当にそうだと思います。それぞれの方が、句会を重ねるほどに、自分の色を徐々に深めて行っているように強く感じるこの頃です。この句会の真ん中にも、始原の眼Vがあると信じています。瀬戸内海に生まれつつこれからも、この句会が成長して行って欲しいと願うばかりです。ご参加の一人お一人が混迷する世界へ向かい大きな花火玉のような俳句の花を咲かせて行ってくださいのを楽しみ致しております。まさに出逢いは人生の華であると、俳縁に感謝、感謝です。句会の様子は、毎月ブログ「海程香川」にアップしています。興味のある方は是非ご覧ください。

本日は、ご清聴をありがとうございますございました。

了